

市史編さん委員会副委員長に

岡崎哲也土佐清水市教育長が就任しました

市史編さん委員会副委員長を務めていただきました弘田浩三土佐清水市教育長が 6 月 3 日付けで退任されました。そこで新たに就任された岡崎哲也教育長に残任期間を引き継ぎ、副委員長にご就任いただくことになりました。

岡崎哲也教育長、お世話をおかけしますが、よろしく願いいたします。

市史編さん委員会 岡崎哲也副委員長より

7 月 1 日に市教育長に就任いたしました、岡崎哲也です。どうかよろしくお願いいたします。市史編集委員会の皆さまには、それぞれがご担当いただいております原稿執筆につきまして大変なご協力をいただいておりますことを心より感謝申し上げます。ありがとうございます。

来年度の完成に向け、原稿のご提出と校正も進んでいるようでございます。今後とも、市史編さんへのご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

土佐節の製法を広めた「土佐の与市」

市史編集委員長 田村 公利

「土佐の与市」と呼ばれた一人の男がいた。呼び名より土佐国出身者と思われがちであるが、宝暦 8 年(1758)に 紀州国日高郡印南浦で生まれた。その頃、印南浦では五島列島・日向・土佐・安房などの他国へ旅漁を行っていた。旅漁先の領主へ入漁税(魚口銀)を支払い沖合いでカツオを釣っていた。

印南浦では、紀州のカツオ節製法を旅漁先の土佐で改良し、より味の良いカツオ節製法を確立した。この印南節を土佐で改良してつくりあげたカツオ節を「土佐節」と呼んだ。「土佐の与市」は、印南浦の納屋番師であり、土佐で改良した印南節＝土佐節の節つくりの名手であった。

与市は、寛政 11 年(1799)・41 歳のとき、何故か生まれ故郷の印南浦を離れ、放浪の旅に出て、安房国(千葉県)南朝夷村のカツオ節納屋を経営する久右衛門の所で納屋番師として働くことになった。土佐節つくりの名手である与市はここでその技術を伝え、これが本格的な安房節の発祥となる。

その後、享和 2 年(1802)・44 歳のとき、与市は伊豆国(静岡県)安良里の五十集屋(いさばや)山田五郎右衛門の納屋で納屋番師として雇用された。

与市が雇用されるまでのエピソードが、実にドラマチックである。五十集屋五郎右衛門の実弟・山田屋辰五郎が江戸浅草でカツオ節問屋を行っていた。与市は江戸浅草

の山田屋の店頭で酒に酔って、酔狂を一発かましたのである。店に並べているカツオ節を味見して、「こんな物、カツオ節とは言えない」と言い放った。そこで主人・辰五郎が理由を聞くと、与市がカツオ節製造の講釈を始めたのである。これが縁となり辰五郎の兄・五郎右衛門の納屋で、日給二分と酒一升という厚遇で雇用された。

この与市が伝授した伊豆でつくった土佐節が、伊豆節の発祥となり、それが各地に伝わって、焼津節・三陸節などになったと伝えられる。

その後、与市は故郷の印南に帰郷したがそこに彼の居場所はもう無く、最期は安房国南朝夷村に戻り、そこで逝去したと伝えられる。文化12年(1815)・行年57歳であった。

参考・引用文献

中山 進「五 近世以南漁民史」(『土佐清水市史上巻』土佐清水市、1980年、879—881頁)

第2回市史編集委員会の日程調整について

毎年10月後半に開催させていただいていた「第2回市史編集委員会」について本年度は9月下旬で調整させていただきたいと考えております。次々と原稿が書きあがったり、ゲラ刷りが仕上がってきていることもあり、早めに編集委員会を設定し、今後の編集方向を確認させていただいた方がよいと考えたからです。

つきましては、別紙の調整表を8月30日(月)必着で同封した封筒に入れてご投函ください。

※編集委員会の構成は、監修・市史編集委員・委託業者・市史編さん室職員になっております。市史編さん委員・市史執筆協力員は第2回市史編集委員会には参加しませんので、調整表の提出は必要ありません。

〈時間帯〉14:00～16:00 〈場所〉市役所内会議室 or 土佐清水市中央公民館

9月21日(火) 9月22日(水) 9月24日(金) 9月28日(火)

9月29日(水) 9月30日(木)

【編集後記】

7月末に「第1章考古(出原恵三委員)」、「第2章古代(東近伸副委員長)」の第一次原稿が完了し、編さん室で構成し、委託業者に8月中に原稿をまわす予定です。第3章は東近伸副委員長と松田直則委員の原稿が今月中に提出される予定です(東近副委員長はほぼ完了)。9月中に第1章から第3章までのゲラ刷りを委託業者に送付できる見込みです。

第4章・第5章のゲラ刷りが完成しました。見直しを行い今、委託業者に再提出しています。9月末の第2回市史編集委員会では、第4～6章のゲラ刷りを各編集委員さんにお見せし、参考としていただけるようにしたいと考えております。

「学校教育史」もほぼ完了しました。「市政史」も執筆の目途が立ち、順調に進んでおり、編さん室で打ち込み作業をしているところです。市史編さんも、いよいよ最終段階へと進んでいます。編集委員各位におかれましては、最期の最期まで油断することなく、追い込みをよろしくお願いいたします。(田村)